

縄文の 響き

奥会津

魂の源流は縄文にある
私たちが指標とすべき根本の理念は
縄文へ回帰することによって明らかになるだろう

かつて、呪力を宿した人型の、空ろに開いた目を見つめる幾多の生きた瞳があった。
この土偶にはどんな物語があったのか。
首に付着したアスファルトは、大事に接着され、修復された痕跡を残している。
頭部にうがたれた二つの穴の周囲は、吊り下げられたあとのようにウルシが剥離している。
人々の呼吸を間近に聴き、
人々の瞳に漂う不安を吸い取り、封じ、
やがて土に埋もれた。
二千四百年の眠りから醒めた今、
土偶の目には何が映るのか。
この目の奥に縄文人の強い視線がある。

p r o l o g u e

縄文への回帰



修

復

さ

れ

た

土

偶

三島町・荒屋敷遺跡出土

第一章

記憶の伝承

日当りがよく平坦で、水が流れ、山がある。
縄文の遺跡は決まってそんな場所にある。
現在の集落も、領域を広げながらもほぼ遺跡の近くにあつて、
ほとんど移動していないのだ。
人が住むにふさわしい場所に、人は住みつづける。
まわりを取り巻く森羅万象すべてに神々が宿り、
共に暮らした記憶は、
私たちの古代皮質に刻印されていて消えることはない。
自然と対話しながらいのちを引き継いだ縄文の人たちの、
知恵や技が息づく奥会津の暮らしを拾った。
埋もれたかに見えた記憶は、
足が覚えていた。
手が覚えていた。
そして、精神世界の深まりの中で
彼らに出会う。

